法陀利華

第389号（令和３年９月13日(月)発行）

発行所
京都女子大学 宗教部
京都市東山区今熊野北日吉町35
電話 075（531）7074

聞此法歓喜
信心無疑者
速成無上道
与諸如来等
（仏馱跋陀羅訳『華厳経』入法界品）

「つながり」を考える

文学部准教授　中西俊英

本年四月より文学部国文学科に着任しました中西俊英です。専門は仏教学です。東アジア地域の仏教、とりわけ『華厳経』という大乗経典とその解釈史を中心に研究しております。

前期はコロナウィルス感染拡大の影響で学生の方々と顔を合わせることがほとんどなく、パソコン相手に会話をしている四ヶ月でした。メリット・デメリット両方ありますが、対面でのコミュニケーションの有用性や、日常の何気ない雑談のありがたさを思い知らされました。また、パンデミックという非常時のなかで起こった大学有志教職員の方々による「助け合い藤の会」をはじめ、世界各地で自然発生した利他的な行動は、今後の希望だと感じています。

図らずも、コロナウィルスによって、「人と人とのつながり」をより意識するようになりました。人と人とが世代を越えてつながり合う媒介としての、共有可能なストーリーや価値というものが、次々と解体されつつあります。それは互いの差異を認め合って尊重する方向を目指してきた当然の帰結でもありますが、同時に、「人と人とのつながり」について、様々な角度から再点検すべきではないでしょうか。

「智慧」と「慈悲」

「犀の角のようにただ独り歩め」（中村元訳『ブッダのことば』、岩波文庫、一七―二二頁）という有名な釈尊のことばがあります。出家して仏教を実践する人びとは、瞑想という方法をとおして涅槃という境地を目指します。戒律を守ること（戒）、瞑想の実践（定）、それによってものの見方が変わること（慧）、これらは、自分自身による実践とその結果としての智慧の獲得です。「犀の角」や「ただ独り」という表現が端的に示すように、他者との関わりは特別必要とはされていません。

一方で、「梵天勧請」というエピソードも伝えられています。さとりの内実を説くことを躊躇していた釈尊のもとにインドの神さまである梵天が現れ、衆生に教えを説くことをお願いし、最終的に受け入れられた、という内容です。梵天のはたらきかけにより、釈尊は「生きとし生ける者へのあわれみによって、さとった人の眼によって世の中を観察され」（中村元訳『ブッダ 悪魔との対話』岩波文庫 八六頁）、説法を決意したと伝えられます。これが仏教のはじまりです。ここには他者が存在し、他者にたいする慈悲が仏教を生み出したとも考えられます。

釈尊から確認される「智慧」と「慈悲」、これらは仏教の両輪です。釈尊にあっては半ば矛盾しつつも併存していた両者にたいする考察が深められる中で、他者と関わる「慈悲」のあり方は、「慈」「悲」「喜」「捨」という「四無量心」として説明されてゆきます。

衆生に楽を与えようと願う心（「慈」）、衆生の苦を抜きたいと願う心（「悲」）、衆生の喜びをともに喜ぶ心（「喜」）、これらは一般にイメージされるような慈悲の意味とも重なります。しかし、「捨」は、「自身の心の動きを観察して、それに左右されない平静さ」を意味します。自身の行為がどのような結果を及ぼすかは分かりません。良かれと思って行った行為であったとしても、良くない結果を引き起こすことが多々あります。他者と関わらざるを得ない「慈悲」という行為の難しさは、「智慧」とセットになっているからこそ浮かび上がってくる。仏教における「慈悲」は、たんなる「優しさ」ではありません。

『「利他」とは何か』

「人と人とのつながり」を考える中で、興味深い本を最近読みました。東京工業大学の未来の人類研究センターによる『「利他」とは何か』（集英社新書）という共著です。伊藤亜紗氏が担当された第一章「『うつわ』的利他――ケアの現場から」では、効果的利他主義およびそれと関連した数値化が、トピックの一つに取り上げられています。利他的な行動が共感に支配されないようにすること、共感よりも理性にもとづいて利他を行うことが重要で、そのために効果的利他主義では徹底した数値化がおこなわれます。背景には、環境問題をはじめとしたグローバルな問題と、それに追いつけない人間の想像力の限界があるとも紹介されています。問題解決のための数値化によるメリット、共感よりも理性という姿勢と上述の「捨」との関連など、様々なことを考えさせられました。

ただ、最も共感し、喫緊の問題と感じたのは、同章における「数値化という価値観」への批判、具体的には、数値化によって利他の感情が消える、という指摘です。一例を紹介すると、子どものお迎えの遅刻を減らすために託児所が罰金制を導入した結果、遅刻する親が増えたそうです。親たちのあいだで「託児所を思って時間どおりにお迎えに行こう」と考える利他的な感情が消えたのです。罰金さえ払えば自分たちの都合のいいように行動していいんだ、と考えたわけです。数字による管理によって、倫理的・感情的なつながりが失われてしまう。「数字の活用の仕方を誤ると、数字が目的化し、人がそれに縛られてしまう」という指摘はきわめて重要でしょう。

縁起の当事者

数字にしろデータにしろ、それを扱うのは人間だという点をゆるがせにしてはいけません。パンデミックで「人と人とのつながり」が希薄化する中、目の前のたくさんの情報にたいして、強いストレスを抱えて処理せざるを得ないのが現状です。このような状況だからこそ、「人と人とのつながり」、さらにはその中の当事者である自分自身について、立ち止まって考える必要があると思います。

「慈悲」の側面をとりわけ重視した大乗仏教においては、見えている世界は見えない世界によって支えられて成立している、という相互連関的な縁起の認識モデルが説かれます。私の専門である『華厳経』が最たる経典で、自分自身を見つめる瞑想の中で到達した認識です。自身の行為は時間と空間を超えて見えないところにまで影響を及ぼしてゆく。縁起的連関の中にある当事者として自分自身を見つめ、問い直し、変わってゆくことこそが、人間の持つエネルギーを他者や環境の方向へと転換することにつながるのではないでしょうか。

ことばの窓

④身にしむや

数年前、蕪村の句を授業で読んだことがある。

身にしむや亡き妻の
櫛を閨に踏む

「秋夜、暗い寝間の片隅でふと踏んだのは亡妻の櫛であった」（蕪村全集）として「小説的虚構の句」とされる。

しかし、なぜ櫛が閨に落ちていたのか。妻の亡霊が残していったとは怪奇趣味に過ぎる。亡くなって直後に寝間が散らかったままになっていたのか。そうであれば「身にしみて」ではなく、もっと激しい悲痛の表現となるのではないか。それに、気付かずに踏んだのであれば、驚いて足を外した瞬間の感覚が詠まれたことになるが、そのことも「身にしみて」の持つじわじわと沁みわたる語感にはふさわしくない。

櫛は「く・し」、即ち「苦・死」でもある。一旦落した櫛は一度足で踏み付けて「苦・死」を祓ってから拾うという慣習があるという。そうであれば、知らずに櫛を踏んだのではなく、拾い上げるために自ら踏んだのではなかったか。死後しばらくして少し落ち着いたころ、妻の遺品を整理していて櫛が落ちているのに気付く、もしくは、櫛を手にして、妻が梳る姿を思い出しでもして、つい取り落してしまった際の句と考える。

櫛を拾い上げるためにはその櫛を踏まねばならない。妻の形見を踏みつけるとは気の進まぬことだ。それに、妻の櫛は妻の苦しみと死の恐怖でもある。櫛を足で恐る恐る踏みながら、死を前にしての妻の苦痛と不安が蘇る。足の裏の櫛のこまかい歯の一本一本の触感が、妻に掛けた苦労と、先に一人で逝かせてしまった後悔とを、微細にしかし鋭敏に思い起こさせる。そのような深切で微妙な寂寥感を、蕪村は「身にしむ」の語で以て受け留めた。

「身にしむ」は、和歌の世界で、藤原俊成の「夕されば野辺の秋風身にしみて鶉鳴くなり深草の里」（千載集）をはじめとして、痛切な心情が秋風と重ね歌われてきた。それを蕪村は、秋風の触感に代えて、同じ肌でも足の裏の触感という風雅ならざる具象的・即物的なものに置き換えた。その落差を面白がるのが俳諧であるが、蕪村の発見した足の裏の感覚が真に迫るものであったがゆえに、和歌での痛切な心情をも取り込んで、新たな詩情を生みだしている。現代の注釈書がこの時蕪村の妻は健在であったと無粋な指摘をするのも、そう言いたくなるほどにこの句は真実の情を言い当てているからなのであろう。

（国文学科・大谷　俊太）

澪標

「昔の真宗・仏教の学匠たちは、仏典を丸暗記していた。そればかりか、それがどの聖典全集の何ページ何行目にあるかまで覚えておられた」。間違いなく事実である。

真宗学・仏教学の研究史は長い。高名な学匠方と比較するのはおこがましいが、私には不可能な芸当である。今日では主要な仏典は、暗記しなくても容易に検索ができるようになった。

名著とされる梅棹忠夫『知的生産の技術』（岩波新書、一九六九年）を読む機会があった。五十年以上前の書物であるから、そこで紹介されるツール（たとえば京大式カード）や技法は古く見える。しかし、ツールをPCで扱うようになっただけで、本書に通底する、情報に向き合う技術、創造的発想を生む着実な技法は、現在でも少なからず有益であろう。

情報の検索は圧倒的に便利になった。図書館の蔵書も新聞記事も仏典も、あっという間に検索ができる。これは捨てがたい便利さである。

仏典は暗記しようとして暗記できる分量ではない。昔の学匠たちは、繰り返し繰り返し仏典を読み込み、議論することを通して、意図せず暗記されたのであろう。

現代は多量の情報処理を私たちに求める。その中で私たちは一つの事柄に繰り返し丁寧に向き合う姿勢を忘れていないか。

仏典の検索を行うたびに思う。「暗記していれば検索作業自体が不要なのに」。「本当に仏典にきちんと向き合えているのだろうか」。（義）

以和為貴

発達教育学部准教授　齊藤和貴

本学に着任して早くも三ヶ月が過ぎようとしている。三月まで東京の小学校の教師として六年生を担任し、卒業式を終えてから慌ただしく教室の片付け・掃除と自宅の荷物の整理・引っ越しの準備に取りかかった。

振り返ってみると一年前の四月、コロナ禍の中、私が担任した子ども達は六年生であった。前年度、一年生を担任していた私にとって、予想外の担任配置に十分な心の準備はできていなかった。二年生の担任になるだろうと疑うことのなかった子ども達である。担任発表の時に、「え～っ！」という叫び声が聞こえてきた。そして、六年生も驚きの表情であった。担任が変わるとは思っていなかったのである。なにせ、私の研究教科は生活科であり、子ども達は生活科のない六年生の担任になるなんて思ってもいなかったからである。しかし、始業式の後、教室で慌ただしく顔合わせをすると、すぐに子ども達は下校。そして翌日からおよそ二ヶ月の休校措置が始まった。

昨年は異例続きの一年間であった。夏の水泳学習、宿泊生活、運動会…、子ども達が楽しみにしていたことがことごとくできなかった。小学校生活最後の一年間であり、最上級生として活躍することを通して、大きく成長するはずだった。そんな中、我慢すること、耐えることを強いられた子ども達であった。進学の悩みもあり、難しい時期の子ども達であった。そして、実際に何度となく子ども達の間に軋轢や葛藤も生まれたが、最後には笑顔で卒業していった。そんな子ども達と向き合うときに、私が一番大切にしていたこと、そして子ども達に伝えたかったこと、それは「仲間を大切にすること、違いを認め合うこと、そして対話を通して互いに成長すること」であった。

だからといって、子ども達に直接的に訴えるということはしなかった。ことばで伝えれば理解され、子ども達が実践できるというものでもない。さりげなく教室環境を構成することや、毎日の授業を通して体現するだけである。もちろん、社会科や道徳など、授業が関連することもある。例えば、以下の社会科の歴史学習での一コマであり、直接私自身のことばで「仲間を大切にすること」を子ども達に問うた場面である。

飛鳥時代の聖徳太子（厩戸皇子）を扱ったときである。太子は仏教を取り入れた政治を行い、法隆寺や四天王寺などの建立し、仏法の興隆に努めた。「冠位十二階」や「十七条の憲法」を制定した。外交面でも小野妹子を隋に派遣し、大陸の文化や政治制度を積極的に取り入れ、国内の中央集権体制の整備に努めた。『三経義疏』を著したともされている。思い起こすと、子どもの時の一万円札や五千円札の肖像は聖徳太子であった。

そんな太子と私との接点が名前なのである。私の「和貴」という名前は、「和を以て貴しと為す」という「十七条の憲法」の第一条に由来するのである。子ども達からすると、「へ～、そうなんだ」という程度のものかも知れない。しかし、太子の業績を歴史的な眼、社会科的な眼で捉え直すと、子ども達の意識も変わってくる。授業の中で、「十七の条文の中で、みんなが一番大事にしたいものを一つ選ぶとしたら？」と問うと、三十五人のうち実に二十人が第一条を選んだのである。第十七条が三人、第五条、第六条、第七条が各二人である。過半数であるとともに圧倒的な差であった。選んだ理由も、「平和主義、平等、団結」といった現代においても通用する価値を表現しているからであった。この年から、小学校六年生の社会科は歴史学習の前に憲法や政治の学習を行うことになったので、日本国憲法との対比が子ども達の中にあったのである。日本人が千年以上も前から「和を以て貴しと為す」こと、仲間と仲良くし大切にすることを生き方、振る舞い方の柱にしようとしていたことが分かる。それでは今の自分たちの学級、そして自分たちの生活がどうであるのか、太子が求める姿を体現することができているのか。子ども達の学習と生活が結びつく瞬間があった。

私自身は、太子の教えを名前にもつことは、プレッシャーに感じることもあった。その反面、誇りに思うところでもある。「和を以て貴しと為す」が太子に由来することは中学生の時に知ったのであるが、この太子の教えも、さらに遡れば孔子の『論語』に端を発するということを、授業のための教材研究をする中で知った。

そんな私が、この春、京都女子大学に赴任した。親鸞聖人の教えを根本に置いていることは承知していた。その親鸞聖人が、太子の夢のお告げによって法然上人の元へ赴き、自らの進むべき道を悟ったということを知った。そして、「ここでも太子が我が身の近くにいるのか」と思いながら四月一日の新任式を迎えた。真新しい研究室には、書架と机と椅子があった。これから始まる新たな研究生活と学生を相手にした教育活動が、どのように展開するのか楽しみである。いずれ六角堂にも参詣してみようと思う。

法のことば

聞此法歓喜
信心無疑者
速成無上道
与諸如来等

（仏馱跋陀羅訳『華厳経』入法界品）

仏馱跋陀羅訳『華厳経』の全体の四分の一以上を占める「入法界品」は、善財童子が様々な善知識を歴訪し、彼／彼女たちから特色のある法を教示されるという構成です。最後は、文殊菩薩によって信心の重要性が示され、普賢菩薩によって三昧の境地へと悟入せられ、上記の偈で結ばれます。この偈は、仏道における「信」の位置づけを端的に示すもので、ここでの「信」は「納得する」「信頼する」の意です。

親鸞聖人は『教行信証』真巻でこの偈を引用され、「この法を聞きて信心を歓喜して、疑なきものは、すみやかに無上道を成らん。もろもろの如来と等し」（註釈版二三七頁）と解釈されます。比較すると、自らが信じるというあり方から、（与えられた）信心をよろこぶというあり方への転換が確認されます。浄土真宗における「信」の特徴を、端的に見てとることができると思います。

（中西　俊英）

シリーズ　智慧の蔵㊴

『いつでも歎異抄』

意訳　井上見淳　画　一ノ瀬かおる
本願寺出版社　二〇二一年

『歎異抄』は、日本の宗教書のなかでもっとも有名で親しまれているものと言っても過言ではない。哲学者の西田幾多郎や作家の倉田百三、司馬遼太郎などの愛読書としても知られ、解説書も数多く出版されてきた。本学で仏教を学ばれているみなさまにとっても、講義のなかや月例礼拝での朗読で、再三目にされてきたことだろう。

こんなにも親しまれ、読まれている『歎異抄』であるが、その中身はというと、古文体で、かつ哲学的な文章で書かれているため、なかなか読み進むことができない、と諦めた方も多いのではないだろうか。そんな方におすすめしたいのが、本書である。

本書では、まず、『歎異抄』のあらましや『歎異抄』に出てくる登場人物がわかりやすく解説されている。また、『歎異抄』の解説にあたる「読んでみよう『歎異抄』」では、原文とともに、『歎異抄』の著者といわれる唯円と親鸞の言葉がやさしく語りかけるように描かれている。たとえば、第二条には関東から命がけで京都に訪れてきた門弟に対し、親鸞が真摯に受け答えする場面がある。そこで親鸞は「いづれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし」という力強い言葉を残しているが、本書では「でもわしはな、比叡山でどんな行を、どう励んでみても、みな中途半端にしかできんかった。つまり、わしにはどの道、地獄以外に住み家はなかったんじゃから」（本書、二九頁）と、表現されている。このように、本書を読むと、老齢の親鸞が、淡々と、しかし切実に、読み手である私に語りかけるような臨場感を味わっていただけるだろう。

本書の後半には、親鸞の生涯や唯円のエピソードも短編でまとめられており、『歎異抄』をわかりやすく、かつ味わい深く読むことができる。仏教を学ぶみなさまにとっての必読の書としておすすめしたい。

昨今、新型コロナ感染症の影響により、日本だけでなく世界中で不安や不満を抱えることが日常的になっているように感じる。こうした日常について、本書のナビゲーターである若先生はいう。「そういう日常の中でいつの間にか心がつらくなった時、『歎異抄』を開いてほしいんだ。きっとそのたびに大切なことに気づかせてもらえると思うから」（本書、九九頁）と。

（那須　公昭）

お知らせ

✻ 本願寺書院・飛雲閣拝観（後期）✻

日　　時　令和３年10月13日（水）15：15～17：00

✻ 秋の見学会（バスツアー）✻

日　　時　令和３年10月30日（土）9：00～18：00
行　　先　滋賀湖東三山（西明寺・金剛輪寺・百済寺）、近江八幡・水郷めぐり

詳細は京女ポータルにてお知らせします。
※なお、今後の国内や本学の状況によりましては、開催が取り止めとなる場合があります。その場合は、大学ホームページまたは京女ポータルにてお知らせします。